

令和三年五月吉日初版作成

大生命の根源 宇宙子

高嶋善三郎

目次

● 宇宙の根源の素粒子	3
● 神々の在り方と、宇宙子の在り方	3
● 自分の内部に神を存在せしめている人間	5
● 神意識を取り戻す	6
● 自己一体観を行動で表現する	8
(参考)	
宇宙子	9
素粒子の世界で	10

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいとか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構です。お聞かせください。また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

宇宙の根源の素粒子

呼吸法を行う上で、宇宙子という存在は、キーワードであり、呼吸法を有効なものにするためには、これをはっきり理解することが極めて大切であります。

そこで、宇宙子とは何か。これについて五井先生の詩集『純白』や『老子講義』等の中で解説されており、それにもとづいて整理を試みましょう。

●宇宙子は宇宙科学の原理によっても、電子や中間子や陽子という、つまり素粒子といわれる地球科学の現在最終の現れより、十七段階も遡った、宇宙の根源の素粒子である。即ち靈妙妙不可思議の大宇宙の扉がはつきり開かれた時（天地創造された時）最初に出現した素粒子で、この宇宙子群の縦横、十字架の大はたらきにより地球世界の今日があるのである。

●今も宇宙のみ心の中から生まれつづけて天に地に縦に横にあらゆるものを生み育てるためにはたらいている。

●人類も動物も植物も鉱物もありとしあらゆるもの生きとし生けるものは皆宇宙子のはたらきの中で存在する。

●常に新たに宇宙心の中から放出されているので、古い宇宙子は、次々と役立っては消滅してゆくことになっている。

●波動の最小単位であり、実質の最小単位であり生命の最小単位である。最小組織はいつも七、そのはたらきは七ではじ

まって七の無限倍数までつづく。

●宇宙子は生命そのものであり、精神的な波動となっているものも、物質的な波動となっているものもあり、この精神と物質の調和によって、この地球世界も成り立っている。そのはたらきは一定の法則にのりながら自由自在千変万化している。

●人類の云う宗教も科学も宇宙子の実体とそのはたらきを知れば自ずから解明されてゆく。

●宇宙子は宇宙の極致数理の極致であり、大調和そのものである宇宙神から生まれているということ以外知られていない。

神々の在り方と、宇宙子の在り方

以上宇宙子についてみてきましたが、特に注目すべきは、「生命そのもの」というところでしょう。それでは、神という概念とどう違うのでしょうか。

『老子講義』第二十講（道は一を生じる）では次のように説明されていますが、結論からいいますと、神々の在り方と、宇宙子の組み合わせや働き方は全く等しい定理（さだめ）によってなされている。宇宙科学の法則に合わせて、神々の宇宙運行の在り方を考えると、神々のみ心が科学的な姿となって判ってくるという解説されています。

宇宙に充ち充ちている大生命が、万物を生みなそうとする力を働かしめるために一なる宇宙の心つまり宇宙心として、絶対

者の一としてその生みの力を結集した。

この一が二を生じた、即ち \oplus （プラス） \ominus （マイナス）陰陽を含めた絶対なる一が、 $\oplus\ominus$ 陰陽の要素を生みだした。これはあくまでも生みだしたのであって、一が二に分かれて、本来の一が二に形を変えて無くなってしまおうのではなく、絶対なる一の中で二つの分かれた働きになった。絶対なる一というものは、無限の縦と横、無限の $\oplus\ominus$ をうちに持った宇宙心である。この宇宙心の働きを二つに分けると、縦と横、陰と陽、 $\oplus\ominus$ ということになる。この原理を一から二を生ず、という。

宇宙心というのは、宇宙科学的に云えば、宇宙核を通して天地を通して天地を貫いて働いている。

もっと云い方を変えると、絶対の一なる宇宙心のひびきは、最も微妙なる縦なる働き、活動している宇宙子の一にもそのひびきを伝えていると同時に、横なる静止している宇宙子の一にも働いている。しかしその働きかけ方は、絶対なる一は、根源的な無限大の二として、縦横、陰陽、 $\oplus\ominus$ の働きの二つに分かれて働きかける。だから絶対の一なる宇宙心は、大小無限の数をうちに有するのであり、それらの活動力の源泉として存在しているのであって、実際の働きは二と分かれた宇宙心のみ心によってなされる。

神道などでは、絶対の一なる宇宙心（心）を天御中主大神（あめのみなかぬしのおおがみ）と称え、二なる宇宙心を、高御産巢日（たかみむすびの）神、神産巢日（かみむすびの）神という

ように、一神の次ぎに陰陽二神の名をつけている。そして次に、三神の名をあげている。

この陰陽二神は、宇宙大の陰陽から、電子、中間子、宇宙子の極微の陰陽 $\oplus\ominus$ の中にまでその働きの権能を有（も）つのである。しかしながら、この陰陽、 $\oplus\ominus$ が如何なる力をもつとしても、その働きを別々な形でしているうちは、宇宙世界には、何事、何物の変化も表現も行なわれないのである。この二なる原理が、この二神の働きが相互に働きかけた時、そこに三が生じるのである。三が生じて、はじめて、この宇宙世界に宇宙神、つまり道、絶対なる一のみ働きが表現されてゆく。

これが、二は三を生じ、三は万物を生ず、という。これは只単に地球世界の物質のことのみをいうのではなく、宇宙根源の世界、つまり、神界から肉体界までの、すべての世界を通しての真理なのである。

宇宙根源の世界、神界というものは、絶対者の一なる心の中にあるのであり、二神、三神、五神、七神というように、先ず最上の段階が七神に分かれておりこれが各自七つの段階に分かれて各種の宇宙運行の働きをなしている。

これが宇宙科学でいう、宇宙子のような極微の世界にも、同じような法則として、同じような働きとして現われてきている。宇宙科学では、七を一つの纏まりとして、七の二乗の四九をその次の纏まりとしているのである。

自分の内部に神を存在せしめている人間

宇宙子の在り方を頭におきながら、神の在り方をあらためてみてみましょう。

『続宗教問答』問90「神様というものを、わかりやすく、誰にでも納得できるように説明するには、どのようにしたらよろしいでしょうか。」の中で、説明されています。箇条書きに整理してみますと次のとおりになります。

●神様を一口にいえば、生命そのものであり、生命の基ということが出来る。この生命は、限り無い智慧、限り無い力、限り無い創造力をもっている。人間が小生命であるのに比べて、大生命とも呼ばれている。

●宇宙の在りとしあらゆるものは、この大生命の心のひびきによって存在しているのであって、この大生命の心のひびきの外にあるものは無い。ですから神様のことを絶対者ともいう。絶対者はその働きの中に陰陽、プラスとマイナスをもっていて、その陰陽の働きによってものを生みだしてゆく。絶対者が陰陽に分かれて、数限りない存在者、存在物となり、絶対者自身の相(すがた)を、その存在者、存在物の中から仰ぎみるということになっている。

●分生命(わけいのち)のほうの人間は自分の内部に神を存在せしめているので、内部の神が、外部の神々と交流しあっていることになる。この内部の一番奥の神の姿を、直霊といい、その分かれとして存在しているのを分霊といい、直霊、分霊の働きを本心

の働きという。そして、この直霊分霊の働きを真っ直ぐになさしめるために、外面的に働いているのが、守護神なのであり、守護霊なのである。

●神様はすべてのすべてであり、人間は神様の子として祖先の悟った霊である守護霊と直霊の半面の働きである守護神に守られつづけて、誰でも神の子の本体をこの地球界に現わさずにはおれない存在者なのである。

●神様は一つであって多(人間)であり、多がすべて一なる生命を真っ直ぐに現わすことができるようになって、神の働きと多なる神の相(すがた)とがはっきりわかってくるのである。

●神は大光明であり、その現われはひびきなのである。言(ことば)は即ち神なりき、と聖書にあるように、言即ちひびきである。いいかえれば、律動(リズム)、波動ということもできる。

●神様という言葉に想いがひっかかる人は、何も神様といわなくとも、自然でも大自然でも、大生命でも、如来でも仏でも絶対者でもどうでもよい。

●大神様は全ての力の原動力ではあるが、それは法則として働いておられるので、その法則に外れたままで、神様の力を自分に働かけてもらおうとすると、法則に外れただけのゆがんだ神様の姿、いわゆる業想念の姿が神様そのもののような顔をして、その人の前に現われる。そうした誤った消えてゆく姿的の神様をかっいでいるのが邪宗教である。

神意識を取り戻す

ここで、私たち人間が神意識を失った経緯について、みてみましょう。

霊・魂・魄として三界（霊界・幽界・肉体界）に活動している分霊はしだいに肉体系人間そのものになってきて、肉体外の六官（直感）直覚（神智）の衰えを見せ、すべてを五官の感覚にのみ頼ることが習慣づけられ、五官に触れぬものはないものと思うようになり、人間とは肉体であり、心（精神）とは、肉体の機関が生み出した働きであるとして、分霊の活動は分霊そのものとしては感じられないようになっていったと言われています。

分霊（魂）が、地上界的な肉体系を纏っているため、本来は神の光の側にあるにも拘わらず、神の光が地球界の闇を進んでゆくとつれて、種々様々な動揺や変化が起こり、闇が崩れてゆく姿を自分と同一視してしまったことにより不安恐怖が生じた。

そして、この顛倒（てんどう）夢想の思いの仕方によって、誤てる想念（業生）は、あまりにたまりすぎると、自己の生命の磁場（肉体、幽体）が汚れるのである。それを洗い浄めようとして、生命の本源から強い力が出てきて、その強い力に押されて、汚れが外部にだされてゆく。この汚れが取れてゆくに従って、生命が輝いてゆくわけであるが、この汚れの取れてゆく姿が、病気や不幸や貧乏となるのである。

その姿が消えてゆき、生命が輝いてゆくものなのに、その姿

に把われ、あらためて不安や恐怖の想念を発し、不安恐怖の想念の層を厚くしていた。

では、神意識を取り戻すにはどうしたらいいのでしょうか。

その方法が、消えてゆく姿で平和の祈りや神聖復活の印等です。これらを最大現に効果あるものにするものは何でしょうか。

これまで、宇宙子のはたらきや神の存在の在り方みてきましたが、その中にヒントがあるように思います。

祈りや印の効果は、消えてゆく姿に把われず、それをいかにスムーズに光に還元していくかにかかっています。

その解決の方法のひとつとして、宇宙子に常に意識して、宇宙子を自分の肉体や肉体意識に降ろし、活性化即ち靈化し、自分の神意識（光体意識）を取り戻すことが考えられます。

五井先生のお言葉によれば、「精神と物質の宇宙子は、常に新陳代謝しているので、瞬々刻々古いものと新しいものが代ってゆくのである。この原理を知らないで、いつまでも古い自己や事物に把われていると、その古い自己なり事物なりを消し去る為に、新しい宇宙子が次々と宇宙心から送りこまれて参り、嫌でも応でも、新陳代謝させられてゆくのである。

古い自己の習慣性、古い事物への執われの想念波動が、消されてゆく姿として、病気や不幸や、国と国との間では戦争など

という、弊れる状態が起こってくる。これを消えてゆく姿」といわれています。

そこで、まずこの真理を理解し、宇宙子の意識とひとつになることがいかに大切か、識ることです。何故なら宇宙子は私たちの生命の根源であり、私たちがこれまで苦しんできたのは、この生命の根源のはたらきが理解できず、受け入れることができなかったからだと考えられるからです。

それはそうだとしても、私たちの日常生活の中、どのように対処すれば、善いのでしょうか

まず今、目の前に現われている出来事、現象は、過去の自分が願ってあるいは、不用意に発してしまった想念などの結果によるものであることを知ることでしょう。ですから、現われたものは、元に戻すことはできないので、それらは「大難を小難にしていただいた」と感謝で受け止めていく以外方法はないのです。

私たちがやるべきことは、生命の根源である宇宙子が自分にはたらきかけていることを意識し、それと一体となるよう、呼吸に集中し瞑想することです。呼吸は生命の根源へと導いてくれます。

では、私たちの潜在意識にある、誤てる想念はどのようにな

って行くのでしょうか。

私の体験からすると、宇宙子と一つになるよう、祈りや瞑想することにより、私たちのハート、即ち本心から発している光が大きく、強くなってきます。その光により、本心から離れていた想念は、光に還元されていきます。また暴れまくる想念も本心を意識すると、本心の中に吸収され、光となるのです。

自分の内部の宇宙子を意識し、それに統一していくことは、自分の外部に広がる宇宙の大生命の呼吸に同調、調和しやすくなり、神のみ心の愛のひびきを宇宙に溢れさせることができるのではないのでしょうか。

また、次のことがスムーズに実行できるようになります。こうしよう、ああしよう、と自分の頭脳で思っているうちは、たいしたことは出来ませんが、宇宙子とひとつとなっていると、思い通りの世界が展開されていきます。

生命の流れというものは、滞らせてはいけません。兎や角思い迷い、心を痛めつけることが一番いけない。それは善悪にかかわらずいけないといわれています。それは、自分の頭脳だけで考えた善行為は、一方では成程善いことだと思われても、一方からは反対の眼で見られるかも知れない。自分の頭脳で考える想いを、一度祈り言を通して宇宙子の中に入れ切ってしまうと、同じことをやるにしても、真我一体の行為として、右をも左を

も誰をも生かし、宇宙運行の大きななごれに沿った善行為となってくるのです。

さらに、感情をコントロールできるようになります。

感情をコントロールするとは、自分の潜在意識の中にある自己中心の感情、即ち業想念感情をなくし、他の人の負の感情を受けても、その感情に執着せず、またそれらの感情に把われても、すぐ放つことができるようになるということです。別の言葉でいえば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得ることができるようになります。

業想念感情は、この人間世界が光一元の世界になるまでは、光そのままの愛の心が、感情の波を超えて、その感情を純化して、働きだし、その感情を光と化し、相手を照らし、人類を輝かすためのプロセスの媒体として存在することでしょう。

自他一体観を行動で表現する

私たち神人は、「人間は霊であり、肉体はその一つの現われであって、人間そのものではない。人間とは神の生命の法則を自由に操って、この現象の世界に、形の上の創造を遂げてゆくものである」と識り、神我一体観、自他一体観を行動として表現し「てゆく」という神意識」を目指しています。

自他一体観について、故村上和雄筑波大学名誉教授は著書『スィッチ・オンの生き方』の中において、私たち神人に参考になる興味深い記述があります。

笑顔の人を見て、自分までつられて微笑んでしまう。逆に目の前の人が落ち込んでいたり、機嫌が悪いと、なんだか自分まで自分まで悲しく感じたり、腹が立つてくることもある。これは、人間にはミラー・ニューロンという神経回路が脳の前頭葉にあり、そのはたらきにより他人の感情や行動の意図を鏡のように脳内に映し出し「他人の心を読み取る」という脳の大切な機能を支えているからである。しかし現代の社会や自然環境の変化の中で、「思いやり」や「他人の心を理解する」ことがなかなかできない子が多くなってきているなど、私たちの「ミラー・ニューロンシステム」が正常に働かなくなってきていることを警告されています。

このミラー・ニューロンの活動を活性化することが若男女を問わず、現代人には必要。この解決方法の足掛かりとして、まず自らいつも心から楽しいと感じる「笑顔」をすることによって、表情と感情によって、自分の周りの相手に伝わっていく、社会全体に「ミラー・ニューロンシステム」の活動が活性化してくるといわれています。

そして村上教授は、ミラー・ニューロンのはたらきに、人の喜びを我が喜びと感じるといふ利他的遺伝子が関与しており、

人の喜びを我が喜びと感じるとき、このよき遺伝子がオンになっているといわれています。

(註1) 遺伝子(DNA)は、身体の膨大な数(体重六十キロの人で六十兆)の細胞のひとつに一粒の米を六十億に分けたぐらいの極小スペースに三十二億もの生命暗号を抱え、そこに身体を形づくり、生命を維持するための設計情報がおさめられており、一分一秒も休むことなく、働いている。

(註2) 目覚めて働いている遺伝子と眠っている遺伝子の違いについて、たんぱく質や、それをもとにした酵素つくることができるか、できないかで定義され、前者を遺伝子のスイッチが「オン」、後者を遺伝子のスイッチが「オフ」と表現されている。

(註3) 人間の身体や能力の差は、遺伝子レベルで見れば、遺伝子の九十九・五パーセント以上は誰でも同じで、違いがあるとすれば、遺伝子を眠らせているか、目覚めさせているかの違いだけである。

さらによき(利他的)遺伝子を目覚めさせるためにできるところとして次の六つをあげられています。

- ① どんなときも明るく前向きに考える
- ② 思い切っている今の環境を変えてみる
- ③ 人との出会い、機会との遭遇を大切にする
- ④ 感動する
- ⑤ 感謝する
- ⑥ 世のため人のためを考えて生きる

これらのことは、既に実践されていると感じられる方もおられることでしょう。とはいっても、これらを通じて個人と人類の利他的遺伝子を目覚めさせていることを知ることがとても新鮮に感じられるのではないのでしょうか。

私たち神人は、たゆまず生命の根源である宇宙子と交流し、いつも心から湧き出る喜びを笑顔で現わしていきたいものです。

(参考)

宇宙子

私は宇宙子

波動の最小単位

実質の最小単位

生命の最小単位

私の最小組織はいつも七

私のはたらきは七ではじまって

七の無限倍数までつづく

人類も動物も植物も鉱物も

ありとしあらゆるもの生きとし生けるもの

皆私のはたらきの中で存在する

今も宇宙のみ心の中から生まれつづけて

天に地に縦に横にあらゆるものを生み育てるためにはたらい

ている

私は生命そのものであり 精神そのものであり 物質そのものである

私のはたらきは一定の法則にのりながら自由自在千変万化

人類の言う宗教も科学も

私の実体とそれはたらきを知らば自ずから解明されてゆく

私は宇宙の極致数理の極致

それでいて私は宇宙神が大調和そのものであるということ以外

何も知ってはいないのだ

素粒子の世界で

―素粒子とは養子や中性子や電子や中間子のこと―

素粒子の世界で

素粒子たちのささやきが聞こえる

僕たちは微妙な存在

広い宇宙と微少な僕たち

地球世界の人間たちは

鋭い智慧で僕たちの存在をつきとめ

まだまだ先へ進もうとする

僕たちの仲間は次第に数多く発見されたが

大宇宙奥は極みなく深く

果てしなく広い

素粒子と云われる微少な僕たちよりも

もっともっと極微な存在が

僕たちの先輩として宇宙の奥で活きている

その名は宇宙子

僕たちはその宇宙子の孫の孫

叡智の泉の大生命の

大能力の指揮のままに

宇宙子群の縦横の

十字交叉の大はたらきに

靈妙妙不可思議の

大宇宙の扉がはつきり開かれ

地球世界の今日が生まれた

宇宙子 微粒子 電磁波 光波

鉱物 植物 動物 人間

この世のあらゆる存在も

この世のあらゆる出来事も

やがて地球の人類が

神のみ心そのままの道をたどり

すっかり解明するだろう

素粒子たちのこもごもに

語りあっているその声を

私ははつきり聞いていた